

# 「主体的に学習に取り組む態度」の評価指標の作成

作成：平澤傑・佐々木聡也・小原翔太（附属中学校）／作成・監修：久坂哲也（岩手大学）

## 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

具体的な評価方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられます。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要があります。

どんな記述や発言、行動をしていたら良いの？

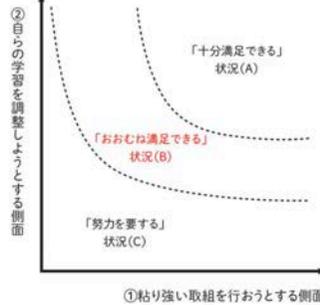


国立教育政策研究所（2019）

## 「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行うとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面から評価することが求められる。

○これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。



## 学習評価の妥当性、信頼性を高める工夫の例

- 評価規準や評価方法について、事前に教師同士で検討するなどして明確にすること、評価に関する実践事例を蓄積し共有していくこと、評価結果についての検討を通じて評価に係る教師の力量の向上を図ることなど、学校として組織的かつ計画的に取り組む。
- 学校が児童生徒や保護者に対し、評価に関する仕組みについて事前に説明したり、評価結果について丁寧に説明したりするなど、評価に関する情報をより積極的に提供し児童生徒や保護者の理解を図る。

評価指標を作ることで信頼性と妥当性のある評価をしたい！



## 真正の評価：信頼性と妥当性

- ・ 信頼性 (reliability)：評価結果がどの程度安定しているか  
→ 内的整合性や再検査信頼性など
- ・ 妥当性 (validity)：評価結果がどの程度的確に捉えているか  
→ 基準関連妥当性、構成概念妥当性、内容的妥当性の3つ
- ・ データのアナロジー



信頼性：大 妥当性：大  
信頼性：大 妥当性：小  
信頼性：小 妥当性：小

※信頼性が低くて妥当性が高いというのは考えにくい

## よく聞くセリフ・・・

- ・ 「粘り強く取り組まないで解決できない課題を与え、教師がその様子を見て評価すればよい！」  
→ ここには2つの問題点が含まれる。
- ①もし複数の教師が同一の児童を評価したとき、評価が一致するか？  
→ 信頼性の問題  
→ 客観的な評価規準がないと、教師の主観的評価になる危険性。
- ②課題を解決できたらA、できなかったらB、Cにならないか？  
→ 妥当性の問題  
→ 「知識・技能」「思考・判断・表現」を見ていないか？  
→ 評価の3観点は相互に関係するが、観点別評価である以上、ある程度区別した上で評価する必要がある。

※補足：相対的難易度が低い課題の場合、知識・技能がA、主体的に学習に取り組む態度がCになる可能性。逆に、相対的難易度が高い課題の場合、知識・技能がC、主体的に学習に取り組む態度がAになる可能性。しかし、このような組み合わせはあまり現実的ではない。そのような評価になった場合、教師の授業設計や課題設定に問題？

## 【中学校理科「主体的に学習に取り組む態度」の評価観点の趣旨】

- 自然の事物・現象に進んで関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。
- 「粘り強い取組を行うとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」から行動レベルで具体化しよう！  
※1：後者の側面は「自己調整学習（SRL）」の理論が基盤となっている。  
※2：自己調整の定義＝学習者が、自分の認知（学習方略）、メタ認知、動機づけに能動的に関与していること。

## 【作成の手順】

- ① 理科教員3名に「卒業時点で身に付けさせたい理科学習に対する粘り強い姿／自己調整の姿」をたくさん列挙もらう。
- ② 列挙してもらった粘り強い姿35件と自己調整の姿50件について、意味内容が類似するものを統合・削除。  
その結果、粘り強い姿は23項目、自己調整の姿は30項目になった（計53項目）
- ③ 全校生徒397名を対象に53項目について5件法（1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる）で質問紙調査。
- ④ 得られた結果について、統計分析（因子分析や相関分析など）によって信頼性と妥当性を検討 → どちらもOK！
- ⑤ 実際の授業で指導・評価しやすいように各10項目まで短縮 → 完成！



## 理科学習における粘り強さの評価指標

- 1 理科の授業で、難しいと感じることがあっても投げ出さず、問題や課題と向き合っている。
- 2 話し合いでは、より良い考え方を求めて深く考えようとしている。
- 3 答えがわからないとき、友達や先生にすぐに答えを聞かず、自分の力で答えを出そうとしている。
- 4 実験で結果が出た後でも、もっと他の調べ方がなかったか考えようとしている。
- 5 授業で友達や先生の話や話を聴くときは、最後までしっかりと聴くようにしている。
- 6 答えや考えが思い浮かばないとき、自分なりにわかるところまで表現し考えようとしている。
- 7 考察の場面で、複数の考え方が現れたとき、どの考え方がより適切かを判断するようにしている。
- 8 実験が上手くいかなかったとき、その理由を明らかにし、正しい結果が得られるように努力している。
- 9 単元を通して解決したいことや身に付けたい力を意識し、授業に臨むことができる。
- 10 友達と協力しながら、自分達分からないことを解決しようとしている。

## 理科学習における自己調整の評価指標

- 1 課題に対して予想を立てるときは、習ったことや生活経験をもとに考えようとしている。
- 2 最初はあまり興味もてない課題でも、それを解決しようと取り組むことができる。
- 3 理科の学習中に自分が分からないことは何かを考えるようにしている。
- 4 授業の内容が分からないときは、自分で調べたり他者に助けを求めたりする。
- 5 観察や実験で結果が出た後でも、他の調べ方がなかったか考える。
- 6 実験するときには、後で考察したり振り返ったりするために気づいたことを記録しようとしている。
- 7 理科の授業後に、今回学んだことに対して新たな疑問点などを見つけるようにしている。
- 8 授業で分かったことを再度自分の言葉でまとめるようにしている。
- 9 授業前と授業後で、自分の考えがどのように変わったか考えるようにしている。
- 10 学習の仕方について友達と確認したり共有したりするようにしている。

できた～！



## 【「指導と評価の一体化」の実現に向けて】

- ・ 今回作成した評価指標は、評価の規準であると同時に指導目標でもある。ただし、作成した各10項目のみに縛られるのも危険である。子供たちの振る舞いや態度を量的・質的に、そして多面的に見とっていくことが大切である。
- ・ 今回、項目の信頼性と妥当性を統計学的に分析するために質問紙調査を実施したが、例えば学期末などに質問紙調査を行い、その結果をもとに評価する、といったことは想定していないのでご注意ください。

## 【本資料に関する問い合わせ先】

- ・ 作成や分析方法について：hisasaka@iwate-u.ac.jp（岩手大学准教授 久坂哲也）
- ・ 評価指標の運用について：hirasawa@iwate-u.ac.jp（附属中学校教諭 平澤 傑）

